

月刊 神戸っ子

2014年12月1日発行 第53巻 第12号
通巻639号 昭和40年1月20日 第三種郵便物許可

KOBECCO

12 2014
December
vol.639

私の神戸デザイン

村上 豪英<神戸モトマチ大学 代表>

小泉 寛明<Lusie Inc.代表取締役>

木野内 美里<株フェリシモ しあわせ生活プログラム事業部

企画開発グループ 課長代理>

内田 圭介<ミドリカフェ 代表>

満保 善英<KOBEパンププロジェクト実行委員会 事務局>

・神戸の初詣

・対談

宇賀芳樹<浄徳寺 住職>×西和彦<須磨学園高等学校・中学校 学園長>

ぶらり私の
KOBE散歩

「神戸ねこあるき」
とみざわかよの<剪画作家>

<http://kobecco.oide.or.jp>

昭和の寺子屋で学んだこと

浄徳寺住職

宇賀 芳樹 さん

須磨学園高等学校・中学校

学園長

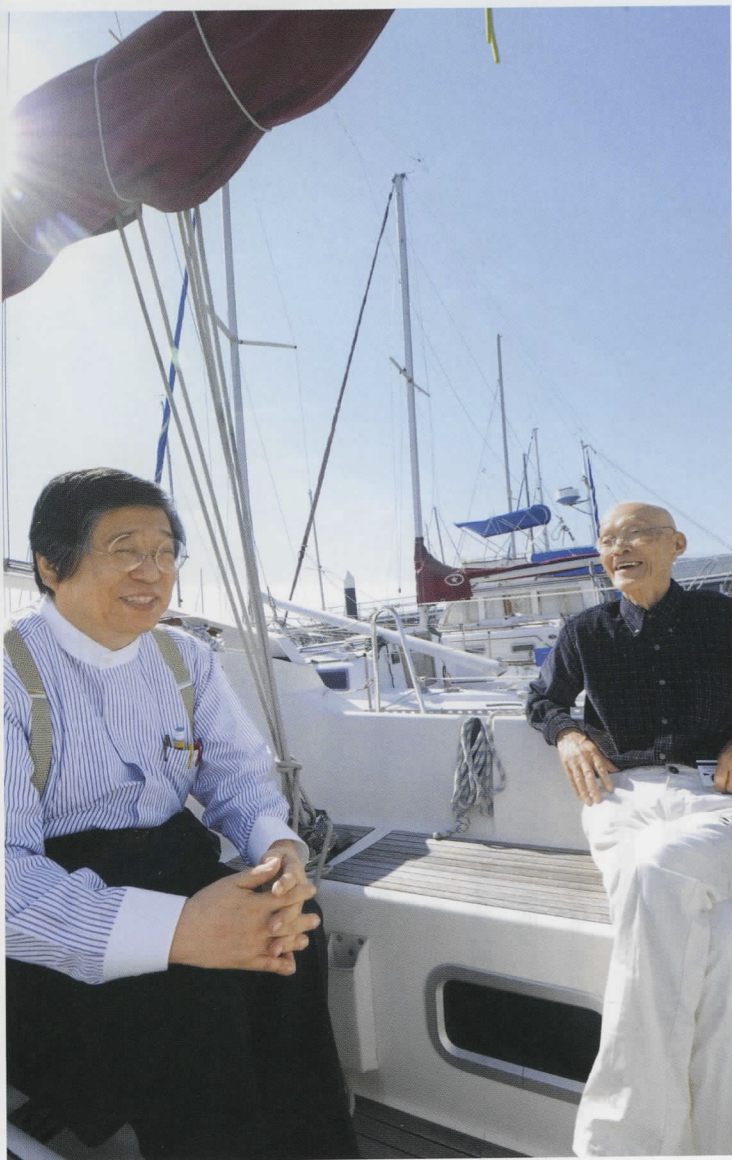
西 和彦 さん

秋晴れに恵まれた10月のある日、須磨ヨットハーバー。

宇賀住職の愛艇「No. Othe」で久しぶりに再会したお二人。

好奇心旺盛な少年と、彼に大きな影響を与えた

住職との縁の始まりは50年前に遡る。



「久しぶりやなあ。10年ぶりかなあ」と宇賀住職。須磨ヨットハーバーにて

強烈な思い出 サバイバルキャンプ

—ボーイスカウト神戸第23団、入団のきっかけは。

宇賀 彼のお母さんから「頼みます」と言われて…入団させたお母さんは偉かったな笑。

西 小学4年生のときですから、カブスカウトに入りました。毎週活動があつて、月1回はキャンプ。それがだんだん増えてきて、毎週キャンプ。そうなるのと要らないものは持つて行かなくなり、荷物がどんどん少なくなる。あるとき、持ち物は米1合と大豆と塩、あとは釣り針とナイフだけ。みんな、「さて、どないしょ?」「魚釣るしかないか」と、須磨海岸で釣りを

初体験。ご飯をこねて餌にして、5人で天コチ5匹釣つて、ありがたかつたなあ。ご飯と大豆の煮たのと、味噌汁と焼いた天コチを食べました。その後はキャンプファイア。宇賀さんが話すとみんな神妙に聞くんです。いろいろありましたよ、ちよつとここでは言えないようなことも…サバイバルキャンプですから。強烈な思い出が残っています。そんな中で、団体行動のルールや野外活動等々、きつと今の子どもたちに欠けているだろうことを教えてもらいましたね。

—どんな少年だった?

宇賀 子どもの頃から、この人には不可能はない。秀才というわけじゃないけれど、好奇心旺盛で、そこにあるモノは何でもすぐに解

体してみる。それで「なーんや、こんななか」と言う。無線機を改造して、とんでもない通信まで受信できるようにしてしまつて、あれはびつくりした。もう時効かな? 電車が磁気の切符になった当初、どこまでも乗れるように作り変えて…15歳の子どもが電鉄会社の大人たちのリスク管理より上をいつしてもたんなやから仕方ないな。

「何でもやってみよう」
発想の原点は「技能章」

—ボーイスカウトの経験が今に
生きている?

西 ボーイスカウトの全国大会へ



ボーイスカウトの大会にて。この頃、西さんは電話級アマチュア無線技士の試験に最年少で合格する



1989年、日本ボーイスカウト兵庫連盟とアメリカ連盟シアトル第53隊との友好親善のため渡米した宇賀住職



ボーイスカウトでの体験が、個性を伸ばす須磨学園の教育方針に生かされている



アジア・アメリカ・ヨーロッパ。価値感の違いを学ぶため、世界一周の修学旅行は3度出かける

行くと、階級が自分たちより上の団が威張っていて、子どもながらに悔しい。何とか階級を上げたいと宇賀さんに相談したら、「よし！いけ」と。そのためには資格要件がいろいろあるんですね。その中に技能章というのがあって、通信章、野営章、自転車章など50以上の項目があるんですが、「できないのに技能章を付けるのは恥ずかしい。何でもいから頑張れ！」と激励され、挑戦しました。結果、20個の技能章を取り、タスキを貰ってバッジを付けました。中学生でしたから学校では英語、数学、理科、社会と全員が同じ科目をやらされる一

方、ボーイスカウトでは「一人ひとりが自分で選んでやる」です。僕の中学時代の勉強の半分は学校、半分はボーイスカウトの技能章と、自信をもって言えます。バッジ20個を貰って気付いたのは、貰うまでの過程に意味がある、ということ。バッジをたくさん付けて威張っているのが大切なことではないと学びました。でも、やってみなければわからない。

技能章はその後の僕の人生での「何でもやってみよう」という発想の原点になっています。これは教育現場でのプロジェクト学習の基本ですね。自由に選ばせて子どもの興味を伸ばし、それを応援するシステムです。

宇賀 「何でもやってみよう」という人だとは知っていたけど、二級船舶免許も取っているとは知らなかったなあ(笑)。

西 ちゃんと取りましたよ(笑)。もう一つ、ボーイスカウトは、学校にはない上下関係も厳しく、上の人には必ず敬礼ですから、「この人は敬礼するべき人なのか？」という瞬間人間観察力が付きましたね。

大切なのは経験すること それが次につながる

—中学生のとき、アジア各国へ行ったのは何故？

西 技能章20個を取ったこともあって、マレーシアで開催される世界スカウトジャンボリーに「日本代表派遣団で行って来い」と言われ、台湾、香港、タイ、フィリピン、シンガポール、マレーシア6カ国を回ってきました。

宇賀 45年前、15歳の少年の持



コンピューター関連の「株式会社アスキー」を立ち上げた早稲田大学3年生のとき。ビル・ゲイツ氏(中央)、ポール・アレン氏(右)とともに

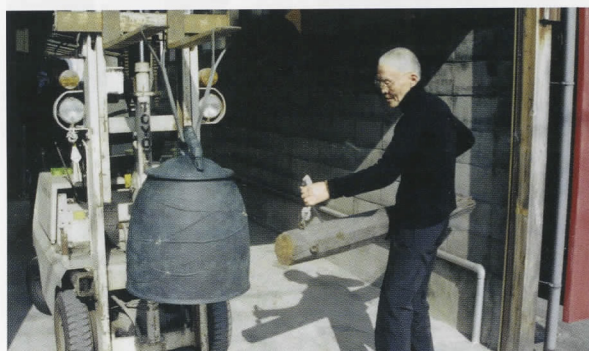
論が、「アジア各国が一つになったらすごいことになる」。いま、ヨーロッパがそうになっているからね、彼の先見の明はすごかった！ある意味では怖いくらい存在をやった。

西 当時、何故か英語が喋れたんです。

宇賀 お祖母ちゃんが偉かった。日豪協会の会長もやってはったからね。

西 神戸にあったころの神戸女学院出身でしたから、子どもの頃から家の中にも英語があつて、胡瓜を「キューカンバー」なんて言っていたので、普段は「なんか変や」などと友達にからかわれたりしていました。ところが、アジア6カ国へ行くところでも英語で話せる。ショックでしたね。出発前には東京へ、おのぼりさん。ボーイスカウト日本連盟本部へ行って、「こんなところがあるんや！」とびっくりしたり、ジープに乗せてもらって文部大臣(当時)表敬訪問に連れて行かれて「僕もジープが欲しい！」と思ったり、いろんな経験をしました。

現在、須磨学園では中2の研修旅行8日間でアジア5カ国を回ります。保護者の中には「何も見ら



宇賀住職は、神戸ブータン協会副会長として、山林火災に遭ったタクツァン僧院を訪れ、梵鐘を寄贈した



宇賀住職が所有する「No Other」にて。西さんは、一級船舶免許の資格をもつ

「やんちゃな子どもたちの隊長。苦労もあつたのでは？」
 宇賀 ボーイスカウトで隊長…と言つても自分では隊長とは思つてないけどね、長いことやってきたけど苦労なんて思つたことないな、一緒にキャンプ行つたりして楽しかつたよ。小学生から大学生になるまでずっと見ているわけだから、みんな子どもみたいなもんや。今でも一人ひとりの顔が浮かんでくる。偉くなった子や活躍している子やたくさんいる。世界で注目を浴びる救難飛行艇「SU-2」の開発

いろいろなことを教えてもらった住職は、人生の師

宇賀 彼のすごいところは、私立校は今、どこも押しなべて同じになつているけど、須磨学園を特徴のある学校にしている。勉強もスポーツも何でもやる。彼の頭の中と一緒やね。

「ない」という声もありますが、何かを見るだけが旅行じゃなく、「行つた」という経験が大事です。この経験で、また次に行けるようになるものだと思っています。

に携つた石丸寛二君、大阪大学大学院の教授になつた菊池章君…。皆、面白い子供やつたなあ。
 西 僕たちにとつてボーイスカウトは浄徳寺の浄東会館。ちよつと他の団とは違う存在だつたと思ひますよ。言つてみれば、昭和の寺子屋です。
 宇賀 わりと近代的なね。
 西 実は、不惑の年40歳で、チベツトまでダライ・ラマ法王様に会いに行きました。
 宇賀 私と同じような所へ行つて、同じようなこと考えてる。似てるんやと思う。考え方が密教的なんやね。だから、何でも取り入れる。
 西 日本人にとつてお坊さんは葬式の時にお目にかかるだけの存在です。でも、僕のそばには子どものころからお坊さんである宇賀さんが居てくださつて、宗教というものが身近だつたことはありがたいことだつたと思います。今になつて思えば、「日常性と仏様」というようなことを教えてもらったと思ひますね。僕にとっては人生の師です。
 宇賀 そんなに言つてもらうほどのもんじやない。ほんまにすごく楽しかつた…こちらへ感謝。



「西君は、ええ坊さんになるで…」と宇賀住職。隊長と隊員の話は尽きない

西 和彦（にし かずひこ）

1956年、神戸市須磨区生まれ。育英幼稚園、板宿小学校、飛松中学校、甲陽学院高等学校を経て、1975年に早稲田大学理工学部機械工学科に入学。大学3年時に株式会社アスキーを創業。アメリカに渡りマイクロソフトでパソコンの設計により米国本社取締役副社長。アスキー社長を経て工学院大学から博士号（情報学）を得て、2001年より須磨学園学園長に。

宇賀 芳樹（うが よしき）

須磨区にある月見山「浄徳寺」住職。2004年、高野山から僧侶の最高位である大僧正を贈られる。2003年には、密教の故郷、フーテンの山岳地帯にあるタクツァン寺院が山火事で焼失、神戸フーテン協会副会長として梵鐘を寄贈するなど復興再建のために尽力。長年、ボーイスカウトの活動を通して青少年の育成に務める。2007年には、モスクをイメージさせる納骨堂を完成させ、現在も「平成の寺」をめざす。